新山協ニュース

発行者　鈴木敏雄　発行所　新潟県山岳協会

〒940　長岡市学校町1－12－23　室賀輝男　TEL 0258－32－0428

第38回国体報告書

成年男子監督　高橋秀樹

◎トレーニングについて

1. 登攀

(1) 最初、選手達の登り方は、確実なホールドを拾い、一歩一歩最も安定したバランスで登るやり方でした。それでいわゆる競技登攀を身につける為、一人ずつタイムレースをやってもらい、スリップしても良いから、とにかくスピードを上げるように指示しました。

(2) 履物については、運動靴、クライミングシューズ、ワラジ、と使ってみて、乾いた時はクライミングシューズ、濡れた時はワラジが良いという事になりました。又選手の好みもある為、全員統一はしませんでした。

(3) ザイルワークの練習は、トレーニング期の後半より始めました。現地での練習や、グラウンドの金網を使って横に歩いての練習等をやりました。

(4) オーダーを早めに決め自分の持場を自主トレーニングをやるように指示しました。

反省

登攀には最も力を入れて練習しました。その為、最初は登れなかった岩場も最終トレーニングでは12分を切るタイムを出しました。それでもタイムがまだ良くなっている途中で期間切れとなり、もっと日数のほしい所でした。

2. 縦走

(1) 最初、各自の自主トレーニングは、体に無理のこない様、空身でのランニングを指示しました。しかし最初の合同トレーニングで、平地では強い選手が荷を担いでの登りには以外と弱い事が有りました。それ以降、自主トレーニングにも荷を担いで坂道や階段を登る様にお願いしました。

(2) 現地でのトレーニングは、本番と同じルートで同じ型でやりました。下りはケガのない様、荷を軽くしました。

(3) 足首迄被う登山靴を購入しました。

反省

縦走は基礎体力であり、合同トレーニングだけではとても間に合いません。各自の自主トレーニングに期待しましたが、2回目の合同トレーニングでは1回目よりグンと早くなっており、選手達の努力に感心しました。

3. 踏査

(1) 一番要領のわからない種目であり、練習には4日間使いました。

(2) まず全員でエリア内の道をくまなく歩き回る事にしました。いくつかのパーティに分け選手を一人ずつ入れました。

(3) ルートの途中で目印をもうけ（特長のある木・岩等）その位置を地図上に記入しました。（メジャー・高度計等使用）又、目印の写真を撮り、後で忘れないようにしました。

(4) 歩測表を作りました。計算をしなくても、直接2万5千分の1の地図上に記入できるように「00歩↓00㎜」としました。

(5) 模擬コースを作って本番と同じ様に練習、成績は60点位でした。

(6) 予想設問と答を書き出し、メモ用紙に整理しました。（本番でのカンニングペーパー用）

反省

よくわからない種目の為、皆で話し合いながら、自己流の練習になりました。反面、選手達も興味があるらしく、とても熱心でした。役員の方からお借りした10m迄の高度計、ロードメーターが非常に役に立ちました。

4. 設営・天気図・計画書

(1) 設営は役員の方からテントを借りておき、各トレーニングの合い間に少しずつ練習しました。

(2) 天気図は得意な選手を1人決め、毎日書いてもらいました。

(3) 計画書は、大会に近い日に最終打合せを行ない、その時全員で分担して書きました。

◎ 本大会について

1. 登　攀

(1) 練習時には登れた上部岩壁が、本番ではホールドが削られていた。その為、トップ、セカンドの2人はラストのショルダーで登ったが、ラストが登れず時間切れ、失格となった。（15位）

反省・感想

(1) 監督のルールの勉強不足の為、選手に適切な指示を出せなかったのが一番の原因です。具体的には、メインザイルに全体重をかけても、失格及び減点にはならないという事を知らなかった。その為、各選手達もスリップ＝失格と思い込み慎重になり過ぎた為時間がかかりました。

又、上部のホールドの削られた場所では、最初からザイルにつかまって登る指示をしなかった為、選手はホールドの無い所で苦労し、結局力尽きてしまいました。

上部の確保者も2人のうち1人はすばやく下降してしまった為、残った1人ではとてもラストの選手を引き上げる力がありません。これも前記のことを知っていれば2人で引き上げる様指示できたと思います。

なおショルダーで登る事はスタート直前に情報が入りとても助かりました。

(2) オーダーを見ると1番岩登りの苦手な選手がラストに残るかっこうになりました。本番前で岩場の状態が変ったのが判った時、オーダーを変えようかどうか迷いましたが結局そのままにしました。選手はそれぞれ自分の持場での作業（カラビナのかわし方、ザイルの収納、等）を自分なりに研究、工夫してきており、それ等をムダにするような変更はできませんでした。

2. 縦　走

(1) 体力に応じて荷を分け、又、途中で調節できる様、小さな荷も作っておいた。

(2) 規定重量より約3Kg多くした。（食糧・水）（6位）

反省・感想

(1) 前日の失敗にも負けないで、精一杯頑張ってくれました。初日の成績は良かったのですが、2日目はやや悪くなりました。強いチームとの実力の差を感じた種目でした。

(2) 非常に悪い日であり、選手も特区を終った後の縦走は寒かったと言っていました。衣類も工夫が必要と思いました。

3. 踏　査

(1) 踏査専用に米や薬品等をザックに詰めコンパクトにしました。

(2) 自分達の今迄調べた事や歩測を信じ、いろいろ迷わないで自信をもってやるように指示。（3位）

反省・感想

(1) トレーニングの努力の一つ一つが実った形で3種目中成績も一番良くとても喜んでいます。

(2) 選手自身が丹念にエリア内の道を歩き回って調べて有った為、本番でマスターマップを渡された時、新しく切り開かれた箇所も有ったが、ルートが頭の中で直ぐに飲み込めました。

4. 設営・天気図・計画書

設営、計画書については満点もらいました。

天気図については、2枚共7点でした。選手の練習時の天気図は非常に良く出きている感じでした。又、本番でも自信をもって書いた様ですがその割に得点が上りません。どこが悪いのか我々にはわからず、やはり専門家の指導が必要かと思います。

◎ 山協へのお願い

1. 5月の国体予選より強化選手決定迄2ケ月近い期間が有り、選手達にとって貴重なトレーニング期間をムダにした事になります。来年はもう少し早くなるようお願い致します。

2. 強化選手の中から本大会の選手を選抜するのは期間が短かいだけに大変です。それで決定通知の時にそれぞれの選手の特長及び、なぜその選手が選ばれたのか等を監督に知らせて頂きたいと思います。又、監督だけ先に決め、選手の選抜に意見を言える様に出来たら良いと思います。

あかぎ国体の監督・選手の皆さん、ご苦労様でした

技術強化委員長　藤　井　信

第38回国民体育大会、あかぎ国体の山岳競技は、群馬県は片品村、川場村、水上町の三町村を会場で、10月15日～20日までの6日間にわたって行なわれました。

本県からは成年男子のみの出場でありましたが、参加46都道府県中、種目別で縦走競技6位、踏査競技3位、登攀競技15位、総合成績で10位を獲得しました。

踏査競技では堂々と3位に入賞、表彰を受けました。

監督・選手の皆さんは力いっぱい頑張り、よく健闘いたしました。心からその健闘を讃えたいと思います。ご苦労様でした。

意地悪というか姑息な運用面で泣いた登攀競技であった。

登攀会場は赤沢南壁で、平均斜度が約80度あるといわれるきびしい会場であった。

監督の報告書にもあるように、最初練習にはいったときは登れない岩場であった。

それが監督の適切な指導と選手達の努力、訓練の積み重ねによって、確実に登攀技術を身に付けて大会に臨んだのである。

登攀競技は雨の中で行われた。中間地点まで練習成果を発揮したすばらしいクライミングを見せる。中間地点から上部取付け点はオーバーハングである。中間地点からのトップもミドルも、ショルダーをかりてのりきる。ラストはショルダーに頼るわけにもいかず、4回5回と懸命に登攀の挑戦を繰り返す。何回、のり越そうとしたか回数は定かでない。息詰まる時間が長い。頑張れ、ハングを乗り越せ。もう少しだ、頑張ってくれ。心の中で神に祈った。私より監督はさぞ切なかったと思う。上部審判台から審判長の「新潟、時間です。」の無情の指示がでる。登攀会場では涙も出なかったが、家に帰って来てから、あのシーンを思い出す度に涙が自然にでてきた。

今回の登攀競技は3分の2のチームが完登できなかった。

中間地点から上部取り付き点のホールドの2箇所を人工的に削ってしまったのである。

審判団では規定時間をクリアするチームが続出すると困るということで、ホールドを破壊してしまったのである。

如何なる理由があろうとも、審判団みずから競技スポーツとしての生命を断つ行為である。

まがりなりにも完登したチームは、前に行われた競技の失敗をみての作戦で、全く形振りかまわずのプレーであった。

監督はメインザイルに全体重をかけると失格になると思っていたこと、ルールの勉強不足のため、選手に適切な指示を与えられなかった点について反省している。

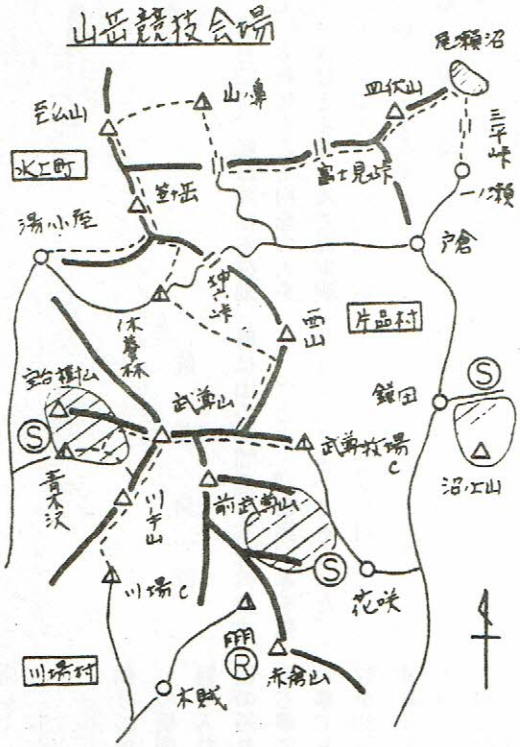
このことについては、監督の反省よりも、一番反省して責任を感じなければならないのは私である。

監督・選手の皆さん、惨めな思いをさせたことを深くお詫びいたします。

ちなみに、強引に中間地点をのり越したとして時間点を加算する。時間点30・47で2位、25・39で3位の総合成績になる。

スポーツであるなら、あくまでもフェアプレーでなければならないと思うのは、負け惜しみでしょうか。

＊　＊　＊



第38回あかぎ国体成年男子

監督	高橋　秀樹	新潟市三軒屋町4847－1	デラシネ山の会
選手	須貝与志明	新潟市中山5－11－7	デラシネ山の会
	藤巻　和雄	柏崎市大字安田5028	柏崎山岳会
	渡辺　　重	新潟市青山8－7－23青山寮	悠峰山の会

ミニヤコンカ講演会を終えて

荒川ワンダーフォーゲル
佐藤　貞一郎

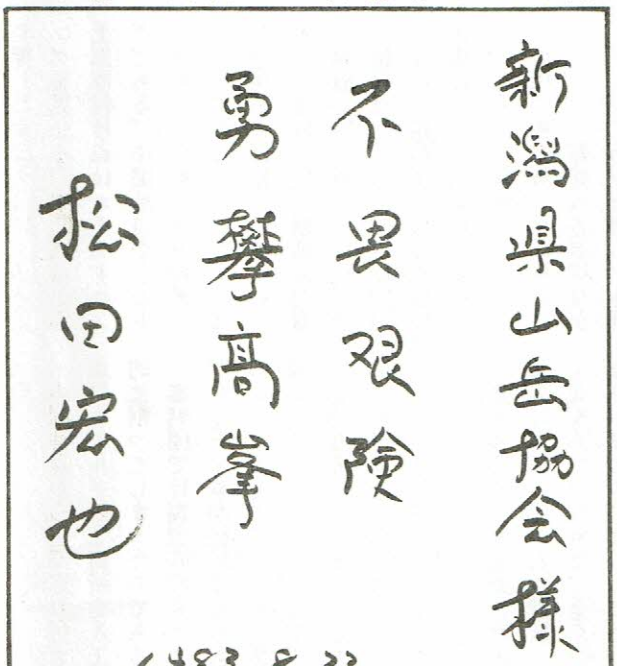
8月23日、私は高なる鼓動で、それはまるで初恋の人を待つ様なそんな心境で坂町駅のホームに立っていた。やがて列車から姿を現わした彼に駆寄り握手を交した。その手は柔らかく両手の指は無かった。松田宏也君が私達の企画した講演会に来てくれたのだ。

彼と知り合えたのは、昨年5月中国ミニヤコンカで発見救助の報道で世界の人々を驚かした時、たまたま彼の義理の姉の実家の方が近所で、山好きな私の所に心配のあまり話にこられた。私とて海外の山等全くの未経験……。でも話を聞き、ともに安否を祈ることで実家の方も気がまぎれるのだろう。そんな時私は一つの約束をした。「彼は必ず元気で帰国し、そして山の出来事を本にするだろう。その時は山の仲間達に本を斡旋する。」と……。事実、本を発行と同時に送ってもらった。ワンゲルの会員や知人に買ってもらったが、まだまだ数十冊の本が残っている……。かねてから山の事等でお世話になっている大先輩の平田大六さんを思い出し、直ちに訪問し、この事を話したら心良く承諾してくださり、本は見るまに完売した。その時平田さんに講演会を企画してみたらと進められ、私もうっかり話に乗ってしまった。その後何度か機会をうかがったがなかなかチャンスもなく、今年3月退院した時彼にこの胸を伝えたところ、まだリハビリ訓練中にもかかわらず、遠出が出来る様になったらぜひ講演をと、全国より約束手形にもにた依頼が舞い込んでいると言う……。

7月末に親戚の方より、松田さんが僚友（菅原信）の墓参りに秋田に行かれると耳よりの情報を聞き、早速彼に電話を入れ、何度かの交渉で秋田の帰り講演会開催の確約を取る事に成功した。8月3日の事である。さあ大変だ。日数が20日しかない。直ぐ様関川村山の会と荒川ワンゲルのメンバーで話合いが初まった。当初は山の愛好者でと思ったが、せっかくの機会だから大勢に聞いてもらう事で、ポスター及びチラシを作成する事にした。一番問題なのは資金の方で、両山の会で折半。足りないところは両役場に補助をいただき、それでも足りぬ金をカンパで集める事に決定。会場費は共催に教育委員会の名前を入れる事により、無料にさせてもらい、もちろん入場者は無料にした。各会員達も仕事をもっている中、お盆前にもかかわらず日夜駆け回り、どうにかメドが立ってきた所で大変な電話が入った。フジテレビが全国初の講演会を取材に来、松田さんの特集を年末に放映するという。初の講演で人が集まらなくては本人にも済まぬ。そこで新聞社に電話し記事に載せてもらう様に頼んだ。早速この効果が現われ各所より問合わせの電話が来た。でも当日どの程度の人が来てくれるかと思うと、夜も寝られず食欲もない。

開演当日、県山協室賀会長初め、藤島玄先生や日本山岳会越後支部長の方々にも御出でいただき、入場者数800人を数え、1時間半の話の予定が、一言も聞きのがすまいと場内は水を打った様に静まり、2時間以上の大講演会になり、9時半に終了した。

私等初めての試みでなにかと勉強になったが、県山協初め各山岳会及び関係各位様の協力で大盛会な催しが出来、主催者側を代表して厚くお礼申し上げます。　合掌



コルジェネフスカヤ峰（7105m）登頂記

――パミールでの高所登山体験――

悠峰山の会　田中純夫

グレート・ヒマラヤの外縁に位置するパミールは7千m峰を擁しているという点でやはり広義に「ヒマラヤ」と呼ばれている。この山域には7千m峰は三座あり、それはコミュニズム峰（7495m）レーニン峰（7134m）、コルジェネフスカヤ峰（7105m）である。この山域には毎年ソ連アルピニズム連盟の主催によって国際パミールキャンプが開催されており、今年は「パミール―83」と銘打って第10回目であった。第1回目には、日本からは新潟大・大阪外語大合同隊が参加してレーニン峰に登頂しており、新潟の岳人にとっても何かと縁の深い山域でもある。

この国際キャンプに参加して7千m峰、氷河の山を体験しようという声が悠峰山の会の中に起こったのは約3年前であった。そして参加希望者も数名集まり、準備と訓練山行を重ねていった。しかし1ケ月という期間、休暇をとるのは難かしく、またその他の事情も重なって参加者は減り、一つの遠征隊として成立するのは難かしくなってしまった。結局参加希望者全員で協議した結果、力量的に不安ということで遠征隊は解散ということになった。その後様々な経緯があったが、私は何とかこの機会に7千m峰を体験したいということでいろいろと検討し、最終的には名古屋の高山研究所のパミール学術登山隊の一員という形で参加することになった。

このパミールキャンプは一応1ケ月間という形で開催されているが、旅行期間なども入れてのことであるから、実際の登山期間は24日程である。この期間で高度順化や荷上げも行なわなければならないとなると、果して7千m峰に登れるのか、ということになるのだが、しかし結果的にはそれは全く可能であり、さらに他の氷河上のキャンプへの移動日数を入れても7千m峰少なくとも2座の登頂は可能だったのである。登山の形式はポーラーではなくアルパイン・スタイルであり、順化さえうまく獲得していれば、この短かい期間でも基本的な体力さえあれば7千m峰2座の登頂は充分可能だった。

我々の隊は全員出発前に名古屋大学環境医学研究所の低圧実験室に入って6千mと7千mとを体験した。この体験は非常に大切と思われるが、それはまず第一にこれによって順化は獲得できないが、しかし入山してからの順化の速度を早めることが出来る。第二に自分の高所での症状や障害を自覚的に体験しておくことが出来るというような利点があるように思えるからである。順化さえうまく獲得しておけば、あとは日本の山と同じように登ることが出来るわけで、登頂の可否は技術と体力と天候だけということになるのだが、この度の遠征で体験的に知り得たことを1つだけ述べてみたい。

それはいくら順化していても6千m以上の高度には出来るだけ長くいるべきではないということである。6千m以上になるといくらうまく順化を獲得していても、それ以上に高所衰退が進行する。そして順化の限界は6500m位で、それ以上では高所衰退あるのみなのである。この衰退はかなり激しく、登高の速度が鈍るだけでなく、下山の力をも無くさせてしまう危険も充分にある。実際にこの度のキャンプでも外国隊員がレーニン峰で下山しきれずに力尽きて死んでいる。また無事7千m峰に登頂してベースにもどってからでも疲労は激しく、平均的に2・3日は絶対に入山は無理という状況であった。

我々の隊はまずレーニン峰からアタック。第1回目4500mのC_1まで、第2回目6100mのC_3まで高度順化。

この時私は体調がよく6800mまで登ったが、そのため結局6100mのC_3に2泊することになってしまった。

これが体力をかなり消耗させることになったようで、下山後体力回復に丸3日もかかってしまった。このため第3次のアタックには参加出来なかった。参加した隊員はこの最終アタックで無事レーニン峰に登頂した。

私は他の隊員がレーニン峰にアタックしていた間ずっと休養していることが出来たので次の目標のコルジェネフスカヤ峰には第1次アタック隊員に加わった。アチク・タシのキャンプからモスクヴィン氷河に移動し、ベース・キャンプを設営。この時点では私も含めて全員6500m以上の高度順化を獲得していた。第1次アタック隊員4人でベース・キャンプを出発。かなり急峻な3100m位の高度差を登り、3日目に私を含めて3人登頂。そのまま6千mの最終キャンプまで戻って泊る。4日目にベース・キャンプまで下ったわけだが、やはり6千m以上に2泊するというのは、レーニン峰の時と同

じくかなりつらく、高所衰退のおそろしさをここでもまた体験した次第である。

韓国　晶元山岳会員来訪

理事長　鈴木敏雄

姉妹山岳会の韓国晶元山岳会、金瀧夫氏を隊長とする一行6名は11月4日正午、小雨の降る中を、私共新潟県山岳協会との交流親善登山を兼ねて、大韓航空で新潟空港に到着。

今年6月、訪韓の県山協婦人部、山田智子さんを始めとし顔なじみの4、5名で空港に出迎え、協会さし廻しのマイクロバスで新潟駅前の在日本大韓民国居留民団本部に落着く。

事務局長の中さんの通訳で6月訪韓の御礼と、今回の訪日を歓迎する一通りの挨拶を終り、一行6名の明日からの日程打合せとなる。

何しろ10月31日夜の電話で11月4日に来日とのことで、こちらの受入れ準備にも万端整うには無理もあったが、山田さん始め皆さんの献身的な好意に甘え何んとか明5日から谷川岳登山、次いで白馬岳登山と12日離日するまでの日程も決り、今日の宿舎となる篠田旅館に入る。

急拠な事ではあったが、その間、登山用具の買出しやら地図を買入れるなど、会員がそれぞれ街を走り廻り夕刻から全員揃って会食となる。

日本酒、ビールで乾杯、言葉も日本語、英語、韓国語と手真似足真似で通じる万国語の岳人の友情は、酒も入り、記念写真やら訪韓の思い出話に花が咲き、時の経つのも忘れさせる一時で、更に山田さん心尽しのスナックバーで飲むやら歌うやらと、終始なごやかな秋の夜長の一日であった。

からりと晴れた秋空の翌5日、谷川岳へとマイクロバスは進み、7日長野県へ移動し室賀会長の案内で安曇野細野から、真白に輝く白馬岳登山と、9日から秀峰富士山と全員無事に東京へと足を運び、12日予定通り全日程を消化し成田発で帰国した。

最後に、今回の晶元山岳会員の来日に際しては、来日の連絡があまりにも急であり日時が限定されたことなどから、加盟各山岳会長あて通報連絡も紹介もしないままに、事務局私共の独断な配慮であった事を深くお詫び申し上げるとともに、特に婦人部の山田さん始め、最初から最後までマイクロバスで同行してくださった、朝路の会、目黒裕介さんには厚く御礼申し上げます。

協会・行事・活動報告

○評議員会　4月3日　新潟ビーチセンター　76名出席

○国体県予選会下見　4月23～24日　新発田　28名参加

○第38回国体県予選会
5月7～8日　新発田
110名参加
踏査競技　長峰原
登攀競技　杉滝岩
縦走競技　焼峰山

○国体委員会　5月15日
東京　藤井強化委員長出席

○婦人部韓国晶元山岳会との交流登山
6月10～13日　10名参加

○全日本登山大会
6月17～19日　埼玉秩父山系　5名参加

○北信越国体会場下見整備
7月5日　焼峰山　5名参加

○全国遭難対策協議会　7月7～8日　新潟　本県講師望月力氏　安野正弘氏

○北信越国体5県打合せ会
7月9～10日　新発田
34名出席

○弥彦松明登山　7月25日

○北信越国体打合せ会　7月31日　新発田　39名出席

○北信越国体打合せ会　8月8日　新潟青年の家　11名出席

○第4回北信越国体　8月26～28日　新発田焼峰山周辺
監督・選手・役員165名

○婦人部親睦登山
9月17～18日　御神楽岳

○第38回あかぎ国体　10月15～20日　別紙　室賀会長
藤井技術強化委員長　片桐強化委員　視察

○親睦登山
10月22～23日　糸魚川

新年会案内

期日　昭和59年1月22日(日)　11時より
会場　新潟駅前ステーションホテル
会費　7000円
申込　上・中・下越連絡事務所
又は
小林兼一郎
0254442－3161
又は
鈴木敏雄
0252－22－9548

各加盟団体長は、人員をとりまとめてお申し込みお願い致します。